

明治三十一年十二月二十六日 禮拜三 第三種郵便物認可

明治三十四年一月一日 發行

毎月二回（一日、十五日）發行

社説

◎初刊の辭（健全なる宗教界を形成せよ）

◎第二十世紀を迎ふ

論説

◎所謂歐米の文明と人道……

社會

◎三週年を迎ふ ◎嗚呼新年 ◎眞宗高田派の美譽 ◎當路者の曰く ◎各宗委員會 ◎『精神界』

文學士 和田 鼎

# 改教時報

雜 録

◎學生の宗教心に關する調査

◎紅葉狩……

信 界

◎精進の心……

會 報

◎信濃國 佛敎徒信濃國民同盟會

文學士 太田 吾風  
清澤 滿之

第十四六號

### 大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し其學徳を高めしめ又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

### 政教時報第四十五號目次

社説	第十九世紀を送る
論説	歲晚に臨みて過去十有餘年間の信仰問題を追懐して將來の希望に及ぶ(加藤文學士) ●大都會(藤岡文學士) ●免囚保護の第一義(山川真純)
社會	明治三十三年を餞す
信界	浩々洞に於ける靜觀(多田鼎)
會報	米國通信(秦文學士)

### 本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす  
 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず  
 一、本誌代金は必ず小爲替にて逕送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事  
 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無
				送
				料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢  
 一、爲替振込局は本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛の事  
 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部  
 東京市本郷森川町一番地

明治三十三年十二月廿一日印刷  
 明治三十四年一月一日發行  
 發行兼編輯人 上村幸三郎  
 印刷 清水朝太郎

### 政教時報

### 初刊の辭

(健全なる宗教界を形成せよ)

顧みれば既に滿二年前なりき余輩不肖自ら揣らず大日本佛教徒同盟會を組織し、十二の綱領を掲げ、普く同愛同感の士と結び、此に余輩が最も記憶すべき明治三十三年を送りて、新に第三十四年の春を迎ふ、外、社會の進歩を考へ世界各國の形勢を察し、内は我邦現時の状態と日本宗教將來の趨勢とを觀察すれば、覺ゆる感慨無量にして禁ずること能はず、先づ新年に際して所感二三を摘記し敢て同感の士に告げんと欲す。

時維れ恰も第二十世紀の劈頭にわたり、基督教徒は大に隊伍を整へ歩武を一にし、瀕死の佛教を全滅し基督教の凱歌を擧げんことを企て、號して大舉傳道と云ふ、余輩彼教徒の世人に宣言する所を聞くに、歐米の政事家、學者苟も知名の士は大に此壯舉を贊し、本年を以て續て我日本に渡來せんことを、從來我邦に在留する新舊二教の宣教師の如きは多く無學無識論するに足らず、社會學術の進歩日に旺盛なるに至りてや彼等が往年の勇氣頓に消磨し嘗て一度は基督教徒と稱せずんば以て世界の氣勢を語るに足らざるが如きの感ありし黄金時代も夢の如く過ぎ去て今や殆んど其氣運を挽回するに困難

ならんとするに當り、内外の宣教師相呼應して新に此壯舉を企つ、余輩佛教を信するの徒と雖も私かに其勇氣と熱心を感

じ、敬嘆措く能はず、然れども此報を聞き他山の石以て自勵、自奮の刺激劑となし、佛陀の洪恩の報すべきを思ひ、大道の宣布に盡瘁せんことを誓ふ者は眞に寥々乎として晨星も嘗ならず蛇蝎奸詐の徒至る所に横行し、中傷離間の策、徳者を嘲り學問を無視し、眇たる隻眼、到底進歩の時運を見る能はざるもの多く、甚しきに至りては僧侶にして言ふに忍びざるの敗徳淫行、更に耻ぢざるものあり、誠に痛嘆の至りに非ずや此の如きの輩我佛教界に蟠るは獨り佛教の體面を汚すのみならず、新進の青年佛教徒をして動もすれば此輩と伍することを厭ふの餘り、遂に涙を拂て絶縁するの止むを得ざるものありしむ、前者可なるか、後者非なるか、余輩は固より深く後者に同情を表し、彼等醜怪なる俗漢に向て鞭撻打撃の勞を辭せざる者、健全なる宗教界を形成せんとするの希望は余輩終生の目的たるのみならず、殆んど吾輩綱領中の第一義たり、蓋し健全なる宗教界は各自信念の確立、品性の陶冶、道德の涵養に基すべきや明白なり、故に余輩敢て不敏を顧みず、此大綱領によりて、只不健全なる社會に向ては健全なる主義の實行を期し、半熟半成の擬文明主義と戦ひ、事、國家と宗教とに關し余輩と主張を異にする者は毫も假借する所ならず此の如き活問題に處しては曲學阿世の徒と少しく見る所を異にし、全然時論と反抗して、事の遂行を圖り、私かに健全なる思想の發達を希望し、彼等が早晚其持論を改むるの日わら

んことを期せり  
 昨年来、余輩が宗教法問題に關して提供したる所論の如きも  
 今尚多く、解せざるの徒あり、冷灰なる哲學者も亦時とし  
 て余輩に一矢を放ちて之を嘲りたることなきに非ず、然れど  
 も彼等の所論の如きは未だ法律の何ものたるをも解せず、國  
 法學の一般概念すら殆んど得ること能はず、又宗教法に關す  
 る一巻の著述だも通讀せずして徒に壯言大語するの輩にして  
 固より齒牙にたくるに足らざるものなりと雖、唯夫れ玉石混  
 淆、事の真相を解せずして漫りに之を嘲り、或は時務に通曉  
 せずして机上の空論に勝敗を争はんとするが如きは余輩の甚  
 だ以て恨みとする所なり  
 要するに今日の時代は尙健全なる思想の充溢するを認むる  
 能はず、惡魔の猛烈なる意志は時として善者を壓倒して世を  
 して皆混濁ならしめ、正義、人道の聲は徒らに人を誘ふの攻  
 道具たるのみにして、真正に其勝利を望むこと能はず、宗教  
 界の如きは積年の病弊最も深く浸染して改良を要するもの誠  
 に多く、教育事業の如きは最も熱心に擴張すべきの事たるに  
 も拘はらず、宗教々育は世間一般の教育より常に一步を遅れ  
 て到底社會の先覺者たる名譽を荷ふこと能はず、其上乗なる  
 ものにして漸く時運の推移に適應するだけの間に合せの人物  
 を作り得るに過ぎず、近く是を東西本願寺の學制に見るも、  
 其最高教育たる、佛敎大學若くは眞宗大學の卒業生が學者と  
 して宗教家として優に社會の上位に立ち、以て教導の任に當  
 る道には尙幾多の修養訓練を要すべきが如し、果して然らば

各宗教の擴張は實に刻下の大問題にして決して輕々に看過  
 すべきものに非ず、特に宗教學校の學風は孰れも余輩をして  
 未だ贊嘆せしむるものならず寧ろ其惡風醜聞の指摘するに堪  
 へざるものあるのみなれば當局者は深く鑑みる所なかるべか  
 らず、更に一步を進め傳道布敎の方法如何を見んか、皆是れ  
 舊佛敎の殘骸を止むる耻辱ならざるはなく、現時の僧侶は其  
 十中の九、此部類に屬し、教育ある人士に向て能く德音を宣  
 布するの任に堪ふる者は一國二三人に過ぎず、實に千中無一  
 の嘆なくんばならず、嗚呼かゝる状態を以て、泰西の新知識  
 を受け加ふるに熱心誠實を以て福音を傳へんと欲する基督教  
 の第二世紀大學傳道に對す、眞に顔色なきの感あり、教育  
 を論ずれば彼等は確に佛敎徒より新知識を有す熱心を論ずれ  
 ば彼等は固より佛敎徒の及ぶ所に非ず、其學校を見よ、其會  
 堂を見よ、其慈善事業を見よ、其社會運動を見よ、其講演を  
 見よ、一々の事皆遜色あり、明治三十四年に於ける佛敎徒は  
 實に一大決心を以て其敎線を擴充するの熱心を喚起せずんば  
 獨り佛祖に對する罪人たるのみならず、社會の有識者より益  
 々蔑視せられて遂に其立脚地を失するに至らんと必せり、嗚  
 呼健全なる宗教的信仰は社會改良の根柢となり、活動の源泉  
 たるべきもの、遮幾くは此慶すべき新年の劈頭に於て諸氏の  
 健全なる信仰を以て着々本會綱領の實踐に一步を進め光明あ  
 る新世紀の歴史をして佛敎活動の大舞臺たらしめんとを、至  
 るの至りに堪へず。

### 第二十世紀を迎ふ

吾人は已に第十九世紀を送りき、物質的文明萬歳の第十九世  
 紀は既に過去の歴史に編入せられぬ、舊き第十九世紀過ぎ去  
 ると同時に新しき第二十世紀は來りぬ、此新しき百年間の思  
 潮の現象は當に如何なるべき、又吾人は如何なる覺悟を以て、  
 此新世紀を迎ふべき、將た迎へたるや、已に述べたるが如く、  
 第十九世紀の特徴は物質的文明にありき、科學の發達により  
 宗教道德の如きは寧ろ打撃を蒙りて、萎靡振はざるの觀あり  
 き、然れども人は固より身心相抱合して成れるものなれば、  
 社會亦肉塊のみの聚合物にはあらざるなり、されば世は如何  
 程物質的文明を利用し、何程應用科學發明の利便に浴すると  
 するも、到底之を以て人心を満足せしむるに足らざるべし、  
 昔者泰皇漢武英邁の資を以て、身は九五の尊位に居り、富は  
 四海の大を有ち、威は九夷八蠻を震懾せしめ、意足り欲滿ち、  
 人世に於て最早求むる所無きに至りて始めて神仙の説を信ず  
 るに至れる如きは、物質的文明のみを以ては精神の饑渴を癒  
 す能はざるの一證にあらざるや、人心已に物質的文明の外に精  
 神の安慰を求むる者なりとせば、社會又何ぞ文明開化なりと  
 誇りて、物質的の進歩をのみ喜びて止むべけんや、夫れ精神  
 の安固を求め、其根帯を自覺せしむるものは宗教を措いて他  
 に求むべからざるあり、去れば完全なる社會の進達發展を期  
 せんとするには是非共宗教の發達を要せざるべからず、是故  
 に歐洲中世紀の如く、社會各般の事物咸く宗教の支配を受け

世は陰鬱となり、物質的進歩停止するに至れるは、社會の病  
 的現象たると同時に、社會に宗教的要素萎靡して、其勢力の  
 缺乏を感ずるに至るは亦社會の不具的狀態に陥れるものに  
 ならずや、余輩は第十九世紀の進歩を以て稍此不具的狀態に陥  
 れるものなるなからんかと思考す、斯る不具的狀態は之を永  
 遠に繼續せしむべからず、且又天運は循環す、社會は一傾向  
 を以て永續すべきものにあらざるなり、之を東西の歴史に徴  
 せよ、かの文藝復興時代に於て中世渾沌時代の最大勢力たる  
 宗教的羈絆を破却して近代の新文明を喚起せるものは、理科  
 學的智識の進歩、フマニズムの唱道等にあらざるや、斯くの如  
 くして十五世紀は終り、十六世紀に入りては、漸く進で宗教  
 問題の天地となれり十八世紀の歴史は諸國概ね革命を以て充  
 たされ、近世中の混沌時代なり次に來れる第十九世紀は順序  
 として理科學的智識物質的文明の發達を見るべかりしなり、  
 又之を支那の歴史に見よ、太古は之を措く、秦漢時代盛大の治  
 を致す久しくして、當時物質的開化の盛大を見しより後漢の  
 中葉より佛敎道教等大に盛興するに至れり而して又唐代の物  
 質的開化を見るの時を経て、宋に至る、宋は性理の學榮に、  
 最宗教的幽玄なる理想を味ひたるの世なり、其後元代は交通  
 事業に發達を見たるのみにして、精神界に對しての貢獻は絶  
 無なりしが、明代又王學一派の起るありて精神界の面目を施  
 せり、今や十九世紀の事業として東西の交通開け、世界の歴  
 史は東西合して一となり、第二十世紀は此歴史に於て、如  
 何なる事業を以て白紙に印すべきか、理科學上の智識も猶進

達せしむべきは勿論必要あり、又此物質的文明を未開國へ移植するも亦此世紀の負ふべき責任なり、然れども猶夫等の事業の外に宗教的問題を盛にせざるべからず、又盛になるべき運命を有せりと信ず、憂世の士は常に此問題に向て心血を注ぐべきなり、達識の士は常に此問題の研究に怠らざるべきなり、若し果して二十世紀の問題は宗教題目盛に興るとせば、其傾向は如何あるべき、余輩固より之を豫言すべき明を有せずと雖も、試に所信を告白せんか、佛耶兩教は益相近接せざるべからず、其間には抱合もあるべし、衝突も起るべしと雖も關係の密邇するは自然の數なり、この關係は歐羅巴の天地にも生ずべし、亞米利加の社會にも起るべし、其他各地に於て此等の問題續起をべしと雖も、我日本國程是等の問題の興起にプロバビリチーの大なる地はあらざるべし、夫歐米の地は耶蘇教獨り跋扈して佛敎の是と拮抗せんは未だ容易に見るべからざる所ならん、支那印度に於ては國民の精氣今や衰弊の底にあれば、之を回復するの日も來るべしと雖も、こは近き將來に於て望むべからず、隨て是等國民に向て、此至大なる宗教問題の解釋を依頼すべからず、去れば地理上の位置といひ、國民の元氣といひ佛耶兩教並立の事情といひ、兩教が互に相近づきて突抵衝突の活劇を演ずるか、親和抱合の一新現象を呈するか、是實に此世紀間に於て、我日本帝國裡にて解釋を與へられざるべからず、此時機に逢遭せる世界の宗教者就中日本の宗教者は、奮勵一番結束して起たざるべからず、此曙れの繪舞臺に出で、世界の觀客に對して演奏に失敗を

取るべからざるなり、日本の宗教者は眞個に大々的覺悟を要する時期にあらざるや、余輩が第廿世紀に關する觀察斯くの如し、而して此間解釋を要すべき諸問題は、教理上に於て起らん、信仰上に於て起らん、事業上に於て起らん、其他諸種の性質上に起るべく、又他の百般の事狀と相聯絡して或は豫想外の邊に生起し來る事もあるべし、何れにしても我佛敎界の繁忙と責任とは從前に百倍するものあるべきは余輩の信じて疑はざる所なり、臆うて茲に至れば、余輩は宗教界に向て偉人の出現を望む事大早の靈覺に於けるよりも甚しきものありと雖も、異常なる大偉人大傑士は、望んで得べきにもあらず、待てりとして何時の世に遭遇せんか知るべからざれば、人々皆自ら偉人傑士と爲らん事を期して、大なる覺悟を以て、健全なる佛敎篤信諸士と共に徐に第二十世紀を迎へんとするものなり

論 說

所謂歐米の文明と人道

文學士 和田 鼎

血によりて其第一頁を記せりと稱せらるる第十九世紀史は其最終の頁に瀧ぐべく更に濃厚なる碧血を用ひぬ、血に初まりて血に終るかくて十九世紀の文明は駭々として其歩武を進めたるなり、顧ふに前十九世紀の初めに當りては、所謂舊態の

破壊は歐洲の天地に擴充せし唯一の主義にして政治といはず宗教といはず、風俗習慣の些末に至る迄其善惡と邪正とを判せず苟くも事の舊に屬するものは擧げて之を破壊し滅却し盡さずんば止まざらんとせり、而して此中點は疑ひもなく佛國なりしと雖も其勢力範圍の及ぶ限りに於て悉くこの主義の實行を見るに至りぬ、是によりて之を觀れば第十九世紀史は一大破壊を以て初まりたるものといふべく、またナポレオンの全權は強制的行動と掠奪的戰爭とを恣にするに於てより見れば又強制的掠奪によりて初まりしといふべきなり、然く大なる舊章の破壊と殘忍なる掠奪とを以て初まりたる第十九世紀史は更に又一層の大破壊と一層の大掠奪とを北清の野に行ひ加ふるに振古多く見ざる所の大々的蠻行を遂ぐるに終りぬ、血に初まりて血に終り破壊に起りて破壊に畢り更に掠奪に初まりて掠奪に終る、第十九世紀史も又妙なるかな、斯の如くにして文明は進み斯の如くにして開化は趨く、強者の權文明の強賣、異人種の惡み、爭鬭、又爭鬭、點詐、又點詐、所謂歐米の文明十九世紀の文明、キリスト敎國の文明、斯の如きのみ、

凡そ個人には個人の特性あり、一家には一家の家風あり、個人に個人の經歷あり、一家には一家の歴史あり、個人は其特性の發揮によりて益々其光を顯彰すべく、一家は其家風を維持するによりて益々其繁榮を益す事を得ん、個人にして其經歷を無視し徒らに他の爲す所に從はんか滅亡踵に接して來らんのみ、一家にして其歴史を無視して漫りに他家の轍に倣はんか

一家の廢滅又期して埃つべし、國も亦然り、一國には必らずや一の特性あり特殊の歴史あり、而してこは一朝一夕の產物に非ずして他年黨習し來りたる所建國の歴史と山河の形勢と土地の肥瘠と氣候の寒熱と共に皆偉大の關係を國民の性上に及ぼすものにして、區々たる人爲の力と僅少の年月とによりて決して改造せらるべきに非ず、又毫も之を改造するの要を見ざるなり、然りと雖も個人に長短の二所あるが如く一國にも又得點と弱點とを有するは疑なき所にして隨て其長は益々之を發揮せしむべく、其短は愈々之を改良すべし、其得點は飽迄之を維持すべく其弱點は之を排除するに吝なるべからず、其短を棄つると共に其長をも併せ失ふが如き其弱點を矯正せんが爲めに其得點を滅却するが如きは共に皆不可なるもの是れ所謂牛角を正さんとて牛を殺すと一般のみ、斯の如きは固より自明の理にして何人も能く之を知了するところなりと雖も然も往々にして長短併せ棄つるが如きものあるは吾人の密かに憾みとする所なり、昔者大坂に釘商あり歐米文物の盛んに輸入せらるるの時に當り自他の釘商が悉く洋釘の製造に改めたるに際し獨り其業を改めず、頑として自家の特質を守り、他が偉大なる器械力によりて日に幾十萬本の釘を造り極めて廉なる價を以て之を販ぐにも關らず、微小なる人工に數多の時間を費して僅少の産額を爲し、價も從て廉ならざる日本釘の製造に餘念なかりしが爲め、其初めに當りては觀客皆争ふて洋釘を購ひ店頭雀籠を張るの寂寥を呈せしが、洋釘の質脆弱にして堅牢なる建築の用に堪へざるを見る

に至るや顧客の需用は再び翁然として日本釘に向ひ嚮き其業を改めたりし幾多の洋釘商は殆んど皆破産の悲境に沈み、頑として自家の特質を墨守したる日本釘の商估は一層其販路を擴ぶるに至れりといふ、是れ畢竟卑劣なる一の例證に過ぎずと雖も一國と他國との關係も又之れに過ぎず、東洋と西洋とに關係の如きも又實に之に外ならざるなり、所謂歐米の文明と東洋固有の文明と各其特色を有し、三千餘年の歲月を閲して以て今日に至りたるもの、政治に宗教に將又謂有社會組織に於て、二者の優劣未だ俄かに判ずべからざるなり、誰か歐米の文明を以て東洋文明の上にありといふ、吾人は諸種の方面に見て敢て一步の遜色だも發見する事能はざるなり、若し夫れ歐米の文明を以て之を東洋に強ひ東洋の文化を以て之を歐米に強ゆるに至りては、共に其可なるを知らざるなり、斯の如きは恰かも上戸に向て餡餅を強ひ、下戸を執らへて酒を強ゆると一般のみ、上戸にして餅を食ひ下戸にして酒を呑む二者共に其體を損せんこと必せり、上戸若し強者の權を恃みて酒の効用を下戸に説き強て之を呑ましめんか心身の癡亂火を賭るよりも明かならんのみ、而して吾人は第十九世紀の終りに於て尙且つ此愚を遂げんとするものあるを見て怪訝の念に堪へざるなり、北清事件の如き畢竟歐米文明の強賣によりて破綻したるものに外ならず、清人の頑迷を嘗りたる歐米の大々的蠻行は、人類の生存せん限り長々に拭ふべからざる汚點を人道史の上に印するものに非ずして何ぞ、吾人は北清事件に於ける露佛人の非人道的蠻行を以て直ちに

歐人の道念を疑ふものに非ず彼のコサック兵の如き固より掠奪と殘害とを以て生命とするもの、血と財とに飢へたる虎狼の群彼種の蠻行は敢て珍らしきに非ず、コサック兵の性質を知らん者は直ちに之を了せんなり、又かの佛兵の如きも那翁以來奪略を以て戰陣の主利となすもの、遠く歐人の視聽を距れたる東亞の天に於て非行を恣まへにするが如きは又毫も怪しむに足らざるなり、然りと雖も其之を指應する所の士官が其部下の蠻行を制する事能はず或は自ら其仲間入を爲して非行を遂けたるが如き者あるに至りては大に鼓を鳴らして之を責めざる可らず、たゞ兵制の不完は之が大原因なるべしと雖も又以て彼等が道念の低下なるを知るに足らん、彼の往年太平洋の南方に鷓張を擅にして良民を苦しむるや、其騷擾の勢管に北清團匪の比に非ざりしなり、是の時に當り、ゴルドン將軍之が征討の任に當り南船北馬具に苦楚を嘗めて遂によく之を討平し恩威并び行ひ、チャイニースゴルドンなる名稱をさへ得るに至り、後世人をして轉た其偉大なる功績と確固たる道念とに敬服せしむるものあり、之を北清の事件に比す、率ゆる所の勇兵は概ね英の傭兵より成り慥奸無賴の徒のみ、其兵としての資格に於ては遙かに北清の野に戦ひし印度兵の下にありしや疑ひなきところ而して其敵手とする所は自ら天帝の次子と稱する洪秀全の一輩、戰略に於て將た其頑強に於て遙かに北清團匪の上をありしや明かなり、無賴不規律の兵を以て殘忍なるこの匪賊に對し尙且つ甚しき蠻行の傳へられざるものは一に統帥ゴルドンの崇高なる人道的觀念に基

きしものと言はざるべからず、彼ゴルドンの如き千古稀に見る所の英物にして常に斯の如きを希望するは不可能の事に屬すと雖も北清事件に於ける歐米の將校中一人のよくこの信念を有せしものなきを思へば是を以て歐米文明國人の道念が如何に下落したるやを證するに足らんのみ、所謂歐米の文明探りて以て我東洋國民の上に裨益する所偉大なるは固より論なき所なりと雖も東洋固有の文明を破壊し東洋を擧げて歐米化せんとするが如きは愚も亦甚しと言はざるべからず、キリスト福音の傳道を名として信仰を他教の人に強ひ後へに刃を懸して東洋の平和を唱導する所謂歐米文明の強賣は斷じて之を排斥せざるべからず、強者の權に藉りて弱者に強うるに無法の要求を以てするが如きは徹頭徹尾排せざるべからざるなり吾人密かに思ふに歐米の文明なる者其物質的の點に於て遙かに東洋の上をあり、是れ東洋人の大に其技に服する所にして確かに一日の長たるもの、力めて之に模倣すべきところなりと雖も精神的の點に至りては竟に彼に劣らざるのみならず遙かに是が上にありと云ふに憚らざるなり、只彼に在ては其表面を錦繡にして一見甚だ美なるが如しと雖も其内は即ち敗絮にして陋劣見るに堪ゆるなり、一言にして之を言はば歐米文明の特徵は凡て表面を美にし形式を壯にして其内容の如何は多く顧みざるが如く然り、こは國家社會の兩方面に通じて謂有方面に認めらるべきなり、東洋にありては即ち然らず其内の美を養ふに力めて其形式は寧ろ之を第二に置くが如し、宗教の如きも佛敎にして洵によく其

眞精神を發揮して布敎の實を擧ぐるを得んか、東洋に於けるキリスト敎の弘布は遂に何の用もなからんのみ彼のキリスト敎徒か謂有社會的事業を以て自家の生命となしつゝあるが如き或は内的信念の外に溢れたるもあるべしと雖も其多數に至りては只表面の行動にしてかくせざればキリスト敎の命脈を維持する事難しと爲すにあらざるが如し、既に根本に於て二個の文明は其性質を異にす、されば彼は是を排するの理なきと共には是は又彼を斥くるのいはれ毫も之をあらざるなり然るを文明は單に歐米にのみありとなし之が強賣を爲すに強者の權を弄せんとす、血を見ずんば止まざる、初めより賭易きの數のみ、殊に一言にして歐米の文明と稱すも雖も其大部分は米國の思想にして自由共和、民主、女尊男卑等の思想の如きは吾邦に取りて最も危険なるもの、根本的に其建國の歴史を異にする二個の思想をして相一致せしめんと力むるが如きは盲論も亦甚しきものといふべし、而して我と米と地理的に最も近きか故に最も初めに入り來るところの思想は常に米國の思潮なり、是を以て直ちに歐米の思想を早斷するものあらばそは大きな誤謬ならんなり、歐と米と一言にして之を概括すと雖も歐洲の思想と米國のそれとは其間諸種の點に於て甚しき徑程あるは識者の夙に唱ふる所、アメリカ建國の歴史を閱せん程の者は皆よく熟知する所なり、彼は共和自由の極端我は主權服從の極端、二者の相距る事雲泥も管ならざるなり、この一般共和自由の思想を提げ來つて主權服從によりて成る我に適用せんとするが如きは誤謬も又甚しといはざる可らず、自

家の長を棄て、彼の擧に倣はんとする固より不可、其之を強賣するものあるに至りては更に一層の不可なるを見るなり、嗚呼血によりて其第一頁を汚したる第十九世紀史は其汚れを全ふすべく更に血によりて其最終の頁を塞めぬ、今二十世紀庶くは支那保全の構成と共に其初頁を起し更に一層偉大な眞文明の完成を以て光輝ある結末を告げん事を、

社 會

三週年を迎ふ

乾坤一旋、世紀茲に改まり、歳茲に新になりぬ、而して本誌亦瑞氣藹々の裡、三週年を迎ふるの好運に達しぬ、人生の數よりいふ素より長しと云ふべからず、然れども雑誌の一週年は當に人生の十年に値し、三週年は即ち而立の歳に達したりと謂ふべし、人生三十にして立つ所謂志操の堅固確實此時にあり、去れど人は年を追ふて老境に赴かんとするは、人生通有の原則として免るゝこと能はず、雑誌に於ては全く然らざるなり、歳月を重ねるに従ひ操節益々固く、一定の針路毅然として世の風波の爲めに紊ざるゝことなきは、これ雑誌の特色なりと誇らむも決して過言にあらざるなり、吾人は數百種の雑誌を以て悉く然りと云ふにわらず、朝刊暮廢、或は死に瀕するもの、或は纔に命脈を維くもの、或は筆を賣り主義を賣るもの亦尠しとせず、吾人は猥に其可否を斷言するを好ま

ざるなり、否、好まざるにわらず吾人は自家頭上の蠅を拂ふに急なればなり、竊に既往を顧みれば、世上幾多の批難は紛々として蟬集し攻撃の聲は絶えざりしも、吾人は内心疼しき所なく俯仰天地に愧ぢず、侃々諤々以て其任務を盡したりき、然れども未だ吾人の素懐を貫く能はざるとの多きを憾みとす。今や世紀新に、歳改まれり、社會の改善果して如何、腐敗の源泉は滾々として盡きじ、教界の刷新果して如何、惡臭紛々として尙去らざるにわらずや、改善や、刷新や一朝にして其効を期しがたしとすれば、吾人の任務一層大且つ重ならずんばならず、微力なる本誌敢て其任に堪ゆべくもわらずと雖も、世紀の新氣運に際し大に勇氣を鼓し、吾人の主義、吾人の持論は第二世紀の曙光と共に尙平和の戦鬪を續けざるべからず、勝敗の如何は固より意に介せざる所、偶々本誌三週年を迎ふるの好運に達せり、乃ち一言を費して將來を誠むと云爾。

嗚呼新年

百八の鐘聲殷々として曉夢を破り、曙光熾々、松青竹翠と相映じ、賀客繽紛として相往來し、屠蘇の醉裡太平を謳歌するは、これ元旦の象にわらずや、嗚呼新年果して賀すべきか、春去り秋は來り、夏過ぎ冬到る所謂四時の變遷は常に轉々運行し須臾も止まらず、歳月の改まるに従ひ、人生は年を追ふて白髮霜鬢當に老いんとす、曷ぞ知らむ新年の容易に賀す

べき事を、天地は悠久にして萬古長へに盡さず、人生古來五十稀なりと云ふ、縱令百歳の壽を保たんと、彼の蒼々たる天、冥々たる地の悠々に比すれば、一電光、一石火に過ぎざるなり、頼みがたく、はかなきはげに人生なる哉、おはれ夕陽斜なる所、墓門苔深うして永く泉下に眠らむか、一死即ち萬事休する時なり。

死果して悲むべきか、生果して愛むべきか、苦痛を脱せんとして死を樂ふものあり、未だ眞に死の悲むべき所以を知らず、流離困頓、一身をおく處なきものあり、生の愛むべき所以俄に知るべからざるなり。

死生を以て念頭におくものあらば、吾は其小膽を笑ん哉。死生を以て念頭におくものあらば、吾は其怯懦に驚ん哉。死生は洵に人生の自由を束縛し、迷妄に陥穽せんとする者、樂しき新年を迎ふ、雖も、一念茲に到らば死生問題は腦裡に浮び來り、恍として忘れんとして忘ること能はざるべし、何ぞ早く死生の迷夢を脱却せざる、何ぞ速に死生の惡魔を驅逐せざる。

眞宗高田派の美學

帝國東洋學會の組織成るや、眞宗高田派は率先して四萬圓を該會に投じたりといふ、財政裕ならざる高派、末寺一千に満たざる高派、所謂渺たる眞宗高田派、何ぞ事のそれ美なるや、吾人は教界の一美事として賛辭を呈するに吝ならざる

なり。

今や眞宗高田派は嶄然として其頭角を擡げんとしつゝあり、博學なる新法主上にあり、加ふるに内部の統一と調和は決して之を他派に見るべからず、如斯して宗門の事業益々振興せんのみ、吾人は教界の爲め大に賀せんとするもの也。

當路者の曰く

客あり宗教局某當路者を訪ひ、談偶々宗教法案の提出を如何に及ぶや、某答へて曰く。  
 今期議會に提出することは、未だ何等の協議の纏りしことなし、二三の新聞紙は議會劈頭に上るべしと、書き立てたるものありしも、これ臆測の甚しきものにして當路者即ち自身と雖も、未だ容易に決定せざる所なり、併し何時提出しても差支なき様調査を遂げ終れり、宗教法の調査に付ては非常に苦心したるなり、參事官連杯は斯道の智識缺乏の爲め、調査行き届かず、殆ど吾輩獨りて調査したる位なり、先づ今日の所で少しく談すべきものは藤堂君而已なり。  
 客更に獨逸にある近角氏の消息を語りしに、當路者語を次ぎて曰く

近角君は獨逸にありて平生の持論を益々強くせしとの事なるが、吾輩も獨逸に漫遊するならば近角氏と同様の境遇とならむ、無論吾輩も雖も近角君の持論と大抵に於て其意見を同うするもの、唯今日の僧侶社會の狀態にては悉く近角

氏の意見を用ゐること能はざるを憾とす  
と、尙宗教界の事に付て互に胸襟を開き談論せられたるよし  
なるが、機を見て再記すべし、今は僅に其一端に止めおかん。

### 各宗委員会

- 一 各宗委員会にては貴衆兩議員へ意見書を贈り、宗教法制定に  
關し注意を喚起する等なりと、而して其意見書の要項は左の  
如しと云ふ。
- 二 宗教法は最親切なる歴史的調査を爲し可成古來因襲の制度と適應せしむべ  
し
- 三 宗教法の制定に關しては比較的研究を爲すの必要あり
- 四 宗教法は公法なり故に宗教法の制定には宗教事務に關する規定を主要とす  
べし
- 五 宗教法の制定は尤も詳密なる調査を要す
- 六 現在の佛教神道及寺院堂宇等に關しては例外法を設け可成慣習を維持すべ  
し

### 『精神界の發刊』

佛陀の徳を誦はんが爲め、佛陀の光を顯さんが爲め、將た現  
代の社會を救済せんが爲めに「精神界」出でんとす、清澤師主  
幹の任に當り、多田、曉島、佐々木の諸兄専ら編輯に力を盡  
さるゝと云ふ。

教界亦一燈明臺を得たり、赫灼たる其光明普く無明の長夜を  
照さん。

(ロ) 學校、——に於ては宗教を厭忌せしむる感化又は刺激  
を受けし事ありと云へる人は割合に多し是等の人の多くは  
中學若くは小學に在りしとき學校教師の宗教の迷信多き事  
學生の是を信する必要な事又は耶穌教の團體に戻る事等  
を聞き宗教厭忌の情を惹起したりと云ふに在り「余が故  
郷及家庭ハ眞宗盛ニシテ父母叔父等ハ皆信教家ニシテ云々  
然レモ小學ニテハ教員等ハ盛ニ佛敎ノ虛妄ナルヲ説キ佛  
教ヲ嘲弄シ宗教ヲ奉ズルヲ以テ却テ賤シムベキコト、シテ  
余輩ニ説ケリ余輩ノ頑是ナキ之ヲ信ジテ家ニ於テ父母ノ命  
ニモ係ラズ家ノ佛前ニ拜スルヲ耻ヂ且又竊カニ父母ノ信仰  
ヲモ心中ニテ批評セリ尋尋師範學校ニ入りテモ教師等ニ聞  
ク所略前ニ同ジ云々」

(ハ) 讀書、——に於て宗教的感化又は刺激を受けたりと云  
ふもの比較的に多し何宗派を限らず宗教的感化を受けたり  
と稱する人の中には偉人傑士の傳記を讀みて偉大なる事業  
には多く一種の信念を伴ふ事を自覺し宗教の必要を感じた  
りて云へる人甚だ多かりき

讀書上に於て宗教を厭忌せしむる感化又は刺激を受けたり  
といふもの亦少からず其多くは科學的智識の増進より來れ  
るものにして中には歴史上宗教の害毒を流せし事實を知り  
て厭忌の情を起すに至りしと答へたる人あり

(ニ) 親戚朋友、——の上に於て宗教的感化又は刺激を受け  
たりと云ふもの亦少しとせず耶穌教の感化を受けたりと云  
へる人中唯朋友若くは親戚に耶穌教信者ありて其家庭の

### 雜 錄

#### 學生の宗教心に關する調査

日本現時學生の宗教心に關する調査の報告は、元良博士及十  
七名の文科大學生によりて公にせられたり、近時我邦思想界  
の潮流が注に宗教、倫理等の實踐的方面に傾注しつゝあるは  
最も喜ぶべき現象なるが、この種の忠實なる調査が同博士等  
の手によりてなされたることは吾人の深く感謝する處なり、  
吾人宗教家の參考に資すべきもの頗る多きを以てこゝに是を  
抄録す、尙詳細に亘る統計と其の説明は前月發行の哲學雜誌  
第六十六號に就て見られよ、

(一) 過去の編歴、

(イ) 家庭、熱心なる宗教的信仰を有せる人の大部分は家庭  
に於て著るしき宗教的感化を受けたる人なり試みに一例を  
舉んに「淨土眞宗他力本願ヲ信ズ(其家庭に於て)余ガ母ハ  
眞宗無二ノ信徒ナリ余ガ父ノ信仰ハ母ノ感化與テ力アリ余  
ハ斯ル兩親ノ間ニ生レシモノナルガ故ニ童幼語ヲ解スル頃  
ヨリ早ク彌陀ノ福音ヲ傳ヘラレ……母ハ常ニ余ガ信仰ノ  
指導者ナリキ而シテ今日ニ至ルモ母ノ音信ハ殆ンド信仰ニ  
關スルモノ多キニ居ル」の如し特に此處に注意すべきは熱  
心なる佛教信者は眞宗の如き他力宗に多き事なり

家庭に於て宗教を厭忌せしむる感化又は出來事に遭遇せし  
事ありと云へる人は甚少なし

清らかなるを見或は其性格の尋常の人はずぐれて高潔なる  
處あるを知りて宗教の必要なるを感じたりと答へられしもの  
割合に多かりしは稍調査者の注意を惹きたり

之に反し信徒の不道德なる行爲殊に僧侶の墮落腐敗により  
て厭忌の感情を起せりと云ふもの極めて多し

#### (二) 現在の状態

(イ) 信仰、——佛教信者は應問者合計九百四十二人中二百  
卅一人にして即ち二四、六%の割合に當る耶穌教信者は合  
計六十八人にして應問者の七、二%にあたる神道は凡て十  
八人儒教は二十四人に過ぎず

佛教を信する理由に就ては幽玄なる哲理を含蓄せるを喜ぶ  
と答へられたるものあり父祖傳來の習慣によると答へられ  
たるものあり耶穌教を信する人は比較的迷信なきを取  
ると云ふものあり現世的にして佛教の如く厭世的ならざるを  
取るると云ふものあり或は又信仰は信するが故に信するもの  
にして何等の理由ある事なし要するに説明の限りにあらず  
と答へられし人亦多かりき

次に信仰なきもの實に應問者全員の六六、七%にあたる然  
れども此事實は直ちに宗教其物に對して一般學生の冷淡な  
る事を證するものにはあらず後項を見よ

(ロ) 宗教を求むるもの及び是を妨ぐるもの——現在一定の  
信仰を有せざるも是を求めつゝあるもの若くは求むるの心  
あるものは甚だ多きに似たり現在信仰を有せざるも之を求  
めつゝあるもの若くは求むる心あるものは殆んど應問者の

半數にして然かも妨害あるがために充分の信仰を得ずと云ふものは又殆ど其半數に達せり其妨害とは何ぞやといふに十中の九分九厘は科學的知識なり「宗教ヲ求ムル心ハ大ニアルモ今日ノ宗教ニテハ科學的知識ノタメニ妨ダラレテ満足ナル信仰ヲ得ルコト能ハズ」との意を以て答へられたる人頗る多し現在ある宗教を信す云へる人にては科學的知識との衝突によりて時々疑惑の中に彷徨すと云へる人亦少からず其他實際上又は家庭の事情に妨げらるると云ふものありしもそれは二三に過ぎず……吾人は回答を檢するに當りある一部の人々は湧くが如き熱情を以て新に宗教の成立或は舊宗教の革新を希望せるに接せしこと屢なりき

(ハ)曾て宗教心を發したることありしとすればこれを失ふに至りし理由、——に就ては科學的知識の増進に原因するものと知識以外一種の感情よりするものとあり其知識よりするものは感情よりするものに比すれば極めて多く大抵二倍乃至三倍なり其感情よりするものの中には何等特別の理由なくして宗教心を失ふに至りしもの若くは僧侶の腐敗家庭の事情等より厭忌の情を生じて失ふに至りしものを含めり

(ニ)若し宗教心を有せずば何によりて身を修むるが、——修身の主義たる各人區々にして一定する所なし

(ホ)宗教厭忌の情、——あるもの應問者の二八、二〇にして少なしとせず其情は概ね宗教に伴ふ弊害によるものにして殊に僧侶の墮落腐敗を目撃し宗教に對し厭忌の情を起せるものにして宗教の必要、——を絶對的に拒める人は殆ど皆無なり

るものにして宗教の必要、——を絶對的に拒める人は殆ど皆無なり

(ハ)宗教の必要、——を絶對的に拒める人は殆ど皆無なり

紅葉狩

佛教一信國國民同盟會幹事太田權右衛門君は長野市の人、家々眞宗本願寺派に屬し、最篤信の護法家なり、君又性來風流を好み、頗る俳諧を嗜す、頃日東館山に遊び、紅葉を賞し、其記文を寄せる、今此欄に收めて讀者諸君に示す

太田 吾風

吾園の楓もすこしく紅みを帯たるに汗漫の紅葉今や見頃なりと聞いていでや高井に紅葉がりせんと十月末の四日曉より支度を調へ草庵ぢらいつ

柴の戸に續いて艸の錦哉

長野一番列車に乗り豊野に下りて草鞋を穿ちこつくと歩みけり千隈川邊の霧ふかければ

朝霧や遠く答へる渡し聲

斯て中野町の藥舖にて賣藥を購ひ護身の備とし箱山峠の開鑿の石わる音に驚けんけんども唯かす立雉子に驚かされ田中の廓も秋寂て招く尾花の影は亂れたれと秋毛を收る田畑の人の賑ひて馬の嘶も豊に聞え安代に着しは正午に近し山口屋に草鞋をとき温泉に一浴して晝餐を濟し果て壽伯を訪ひ黄昏迄厩り夜は竹遊といふ盲人來たれり通稱は慶泉と呼ぶ按摩なり記臆強うして誹句をよくす先年より予が讀拾し句も此盲人の爲に拾はれし事幾度もありたりされ景色の句を好むの風あり折々は盲人の句も作るべしと去年の春語りしを能く意得や出

來けん旨の句ありとて十句を讀置かる中に

香を杖にさぐり當たる野梅かな 竹遊

それ〜といはれてさぐる牡丹哉 同

其色はしらねと菊の句ひ哉 同

日當りは我にもぬくし水仙花 同

二十五日 安代を立いで澁の和合橋にて温泉寺の回廊の跡を眺め惜き事なりとそゝるに涙の浮めば卵塔もうらめし氣に並べり沓野村を打過ぎ滑坂の峰杯いふ屈曲強き坂を登り路傍の石に腰かけ紅葉の錦に包れたる心地して「極樂は蓮華ばかりと聞きつれば高天ヶ原はもみぢなるらむ」と戯れたる科にやありけん東の山に薄雲の起るよと見る間に谷一杯の霧となり錦の佳境を奪ひされり桔梗女郎花は見る影もなう哀れなるに野菊編り道の兩端に白く〜と残りたる優しさに慰められ漸々平地に出れば何れに神の立せ給ふらん鳥居斗り古く立たり發補は此處より左りに入る右りに沓打茶屋といふ小やかなる茶店あり暫く之に憩ひ發補の道を問へば澁よりは是迄一里八丁茲より發補へは一里半にて強き登りなしと先づ汗漫の紅葉を見むと露けき道を三丁程右にいり瀑布を觀る處にいたれば紙の切れ〜烟草の吸壳石を集めて窰をつき火を焚たるは誰が樂みし跡なりけん瀑布の音のみ聞居たるに霧は忽ち晴渡り日光赫々と照給へば一度疎みし霧の爲に紅葉の光澤猶一層の見榮えしたり

けふらすも又にくからず紅葉狩

踵を戻し草津街道を横ぎり發補の道に入れば霜解に登り坂に

は汗をかきしも下りとなれば沁るも又おもしろく溪川の橋を渡り雲にもいる心地して辿りゆくに紅葉のはら〜とちるけしきに裏ちりつ表をちりつ紅葉哉とは木因の句紅葉折る會比ど谷に風きけりとは梅室もよく讀たり爪上りの山を次第に深く進みしに道の傍に炭焼居たる男笠を脱ながら腰を屈め私も天狗の湯の主となりと名乗出たる姿のいかにも質朴にして山賊とも見せざれば男のいふが儘に持あぐみたる小包を渡せば肩にかけ道のあしきを詫る如く先に立山の鼻を廻り家を見かけて登る事五六丁にて宿に着く爰迄は山にむかひ〜と登り家の際にて横に折れ初て廣き眺望に驚き夫婦の案内に隨ひ座敷にゐるに間口九尺奥行二間半に秋なればは栗色の蠟七枚を敷き半燈は空柄なり南一方は取合せの障子三本に切張に切張を重ね三方の黒き荒壁には新聞の腰張に天狗面の落書杯いとおかしかり柱にかけた一枝の紅葉は先客の置土産と見ぬたり疊有たる丈結構とおもひしに座蒲團迄とは儲物の心地して座につけば廿八九の女房兒を負ながら火鉢や巨燵に火を運び茶に花かけの菓子添主しも來たり物語に田坂前は來客を謝絶する程の繁昌も今や農繁の時迎客は我一人のみ

二十六日晴

抑發補の温泉は下高井郡の北端に位する東館山の懷にして平穂村字沓野の地籍に屬し二戸の宿あり上の湯下の湯と唱へ上の湯は沓野の農圃新作或夜の夢に天狗來り方角を指示し銘湯あり開くべし是に浴する者はいかなる病も癒ゆすといふ事



なしと夢覺て妻に語るに妻もおなじ靈夢を蒙り草木をわけて道をつけ明治元年小屋掛にて温泉を開き天狗の湯とも唱へ湯の出る處は浴室の後ろ僅に三間程北の高みより(ホウボウ)と音して出るを窺にて浴室に落せり建家は三間四方の浴室を中にして二階造の客室居宅を一文字に南向に建て並べ天狗の社は丑寅に登る事百歩餘西向に鎮座まし社の後ろの大龍は此地を淨め詣づる人の魂を寒むからしむ湯の出る音を名にして發補と云とかや

下の湯を藥師の湯とは藥師堂あればなるべし明治十年白銀屋某の建たるを圓嘉藤の譲り受たるものなりとぞ總ての建物は上の湯の半に過ぎず

菜蔬は葱大根馬蹄薯等は家の廻りの小畑に依り春は落竹の子は此地の名物なりと

風呂吹や侮り兼し焚加減

二十七日 午前三時より小雨降りぬ主しは予を俳僧師とや見にけむ一茶の一軸を持來り柱にかけ短冊數葉の發句を認め吳よと出けるにより亭主も俳人なるかと初めてさとりけるに猶評を乞んと半紙四五枚に百句餘を認たるを出せり中にも「朝顔や朝寢の庭に咲揃ひ」杯は格別に感心せり談話中雨も止みたれば山稼に往ひと支度ながら庭に立山々の名を申べしと指して教へけるを筆を執てしるしぬ

あの雲の下は長野のしぐれ哉  
冬の日のかゝりさうなり館が嶽

(未完)

信 界

精進の心 清野満之

勇往邁進とか勇猛精進とか驚直進前とか云ふ様な言句は澤山ある言葉で、何れも皆吾人に必要なる徳行を教ふるものと傳へらる、其事は如何なることかと云ふに、ツマリ何事でも「ズット」やれと云ふのである、ナンデモナイことである、「ズット」やる丈のことである、然るに此ナンデモナイことが甚だ六ヶ敷イ、年を取りて、智慧や經驗が増すに従ひ、彌六ヶ敷クなることである、此でよいかしらん、此ではわるいかしらん、やるがよいかしらん、やめるがよいかしらん、反て小兒の時の方が決斷がよい、思ふ事を直ぐ「ズット」やる、ド云ふ譯であらうか、小兒は無邪氣であるからである、實にソである、小兒は無邪氣である、然るに大人は何故に無邪氣でないであらうか、事實は銘々の實驗上明かである、ドーモ事が無邪氣にやれない、智識が邪魔をする、經驗が邪魔をする、向ふの事情を知られば知る程、氣の毒で物が云へない、先を考ふれば考ふる程、善いか悪いか分らぬ様になる、若いものは活潑で、年寄が因循なのは通常の話であるが、其實は能く味うべきことである、道理上から云へば、若いものが因循で年寄は活潑であるべき筈である、智識が勝り經驗が勝りて居て、反てグググすると不都合ではないか、當時の學者の中には、此グググする處が勝れた處で價値のある處で

あると云ふ人がある、けれども、只グググすることが價値があるとは決して云へないことである、兎に角此グググは苦悶である、吾人は此苦悶を脱却して、着んと事がやりたいではないか。

如何にして吾人は此苦悶を免かれ得べきであるか、智識や經驗は、此苦悶を取り去る所の道具ではない、ドーすればよいか、驚直進前するかよ、ズット」やればよい、彼れ此れ思はぬがよい、善だの悪だの是だの非だのと妄想分別に陥るからいけない、然るに吾人はドーもズット」やれない、兎角妄想分別に陥り易い、此は何故であるか、外ではない、自己の利害と云ふものが念頭に立つからである、自己の功名心が先にたつからである、失敗しては不面目であると云ふ想が根にあるからである、畢竟自己と云ふものを中心として居るからである、吾人は之を轉覆せねばならぬ、吾人は自己中心主義を破却せねばならぬ、然るに一般には人を奮發させるには、利害が必要である、功名心が必要である、面目を念ふことが必要であるとして居る様である、此は大變な間違ひである、よく思ふて見るべきことである、利害を念へば鋒先が鈍るではないか、功名心によれば迷が多いではないか、面目を構ふて居ては自由でないではないか、勿論吾人は或點までは、利害や功名や面目の念にて勵まざるゝことはある様である、然れども、よく考へて見れば、彼等は常に吾人を苦悶せしめつゝある、而して實際の結果は、他の心念によりて行くのと同じ事である、寧ろ他の心念によりて行く方

が、遙に優りてある様である、喩へば、君の爲國の爲と念ふて働く方が、我が利害や功名や面目やを念ふて働くよりは、奮發が餘計に出来る様である、自己中心主義を止めた方が、精神上の歡樂は、頗る盛である。

然るに此君の爲國の爲と云ふ様な心念も、事によれば、實行的邪魔をすることがある、此で果して君の爲になるかしらん、此で果して國の爲になるかしらん、と云ふ様な疑念が生ずることがある、又或は、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、と進退維れ谷ざる様なことがあつた、此はドー云ふ都合であるか、ヤハリ、利害得失の念を脱却しないからである、君の爲親の爲杯と云ふ時は、君の利害親の利害を主要とするのである、利害を主要とするから、思想分別の迷路に陥ることである、吾人が本當に勇往邁進せんとする時は、吾人は根本的に此念を脱却せねばならぬ、功名心や、面目心に於ける場合も推して知るべきである、吾人が本當に君の爲、國の爲めにせんとする時は、吾人は吾人の思想分別を抛棄せねばいかぬ、コーすれば君の爲になるか國の爲になるか、アアすれば君の爲になるか國の爲になるか、と、君の爲國の爲を自分で思案して居ては、曾て之を決し難きのみならず、時には其爲と思ふたことが爲にならぬ場合がある、又時には反て不爲になる場合がある、然れば、ドーすれば可いか、外に仕様はない、自分の思案分別を全く抛擲し去りて、直に命令を聞くべきである、君上の聖勅に服し國家の命令に従ひて、疑慮なく一心不亂に勇猛精進するが、

忠臣義士の操行である、親に對する孝も、友に對する信も、本當に之を行ふには、自分で彼れ此れ思案すべきでない、親の命に聞き、友の言に聞き、寸毫も自意を交へずして、慕直進前するが、即ち孝と信との實行である、君の事は君に聞き、親の事は親に聞き、友の事は友に聞き、自身の事は之を自家の良心に聞き、勇往邁進して毫も停滯なからんことを期するもの、是れ佛陀の大慈に接觸して、其靈光の感化を受けたる者の心狀である、此心狀にて進み行かば、何事にも、無邪氣にやり得らるゝ様になることである、

會 報

信 濃 國

◎佛教徒信濃國民同盟會 豫て本誌にも報せし如く、同會にては秋期演說會を開くに付、本部より本多眞岡兩氏出張の筈なりしが、種々の事情により、開會延引し居りしに、愈先月十五日より開會の運びとなり、本多眞岡は同日上野發一番列車にて長野に向はれたり、開場は川市權藤町明行寺なりき、同日は夕刻六時半頃より開會せられぬ、年末に際し、商家最繁劇の候なるも同會幹事長渡邊仁兵衛幹事太田權右衛門、山田定治郎等諸氏の斡旋盡力により、諸種の準備も行届き降雪後道路殊の外泥濘、且寒氣甚しきも聴衆も満堂なりき、渡邊幹事長先づ開會の趣旨を述べられ、次に本多氏は國民團結の三大要素、報息と題して、二席の長演說を試みられぬ、翌十六日は午後二時より開會したり、幹事山田氏一席演べら

れ、次に本多氏は社會教育、正義といふ演題にて二席の説演あり、其夜亦七時頃より開會第一席山田氏、第二席渡邊氏にて次に本多氏二席演せられぬ、演題は國民道德の階級、及感應同交なりき (未完)

本 部 廣 告

謹 賀 新 年 在伯林近角常觀

本多辰次郎  
眞岡湛海  
百目木智理

謹 賀 新 年 木郷森川町一番和 田 鼎

謹 賀 新 年 小石川表町一 桑 門 典

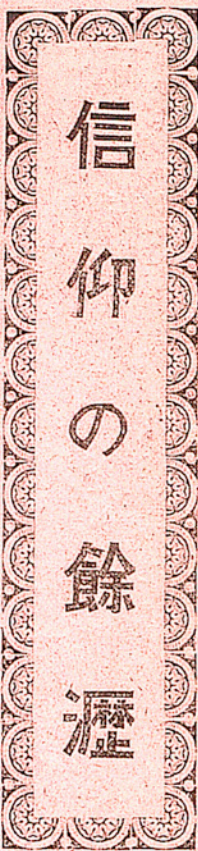
謹 賀 新 年 本郷森川町一 曉 鳥 敏

謹 賀 新 年 本郷森川町一 萩野伸三郎

謹 賀 新 年 京都 土倉是空

謹 賀 新 年 羽後 小林定基

文學士 清澤滿之師序  
文學士 近角常觀君著



全 一 冊 寸 珍 美 本  
紙 數 百 頁 餘

●特別減價一部金十錢●郵税二錢●郵券代用一割増の事

本書は著者巽に一たび政教紙上に掲げ、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其説く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、吾人人生の大問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ。清澤師本書に序して曰く、宗教は人心をして其根帯を自覺せしむるものあり、信仰は即ち其自覺あり、社會にして宗教を欠くは、其發展の一大要素を欠くなり、個人にして信仰の立たざるは、未だ其根本的不明を斷ぜざるあり、吾人の從來する所如何、吾人の趣向する所如何、吾人の價值は如何、吾人の運命は如何、凡此等吾人々生の最大問題は、一として最後の信仰に繫屬せざるものあることなし、宗教的自覺の世道人心に必要なること論を待たざるなり、(畧)近時宗教を喚呼する聲の甚大にして信仰を告白する説の甚盛なる如きは皆以て徴とするに足る、近角君の如きは最早此聲にきき、最早此告白を試みたる一人なり、(畧)これ固より君が信仰の餘瀝に過ぎざるもの、未だ以て君が信仰の全般を盡す能はずと雖も、君が如何に宗教を觀取し、如何に之を實驗し、如何に之を玩味せるかは、此數篇の間於て之を瞥見し得べきが如し云々、座右に供へ熟讀玩味せられむことを希ふになん、謹で告ぐ

注意 本書は前金にあらざれば送本せず●十部以上割引す  
照會は必ず往復はがきに限る事 ●「政教時報」と別會計なるを以て雜誌代の中より差引すると堅く御斷の事  
既刊發賣 ●着金の順序によりて直に送本す

發行所 ●東京本郷森川町一番地 大日本佛教徒同盟會出版部

毎月一回  
一部定價  
金十二錢

# 精 神 界

一年前金  
一圓廿錢  
(郵税共)

『精神界』は、罵らむが爲めに、嘲らむが爲めに、晒はむが爲めに、怒らむが爲めに、世に出づるに非ず。佛の徳を歌はむが爲めに、世に出づる也。

『精神界』は、争はむが爲めに、破らむが爲めに、憤らむが爲めに、戦はむが爲めに、世に出づるに非ず。佛の光を顯はさむが爲に、世に出づる也。

苦と悲との谷を出で、歡喜と安慰との野に遊ばむと欲する者は、此處に來れ。我等、諸君と共に、こゝに語り、こゝに笑はむ。『精神界』は、苦しめる者、悲しめる者の樂園なり。

## 第 壹 號

(明治三十四年一月發行)

精神界の誕生の精神主義◎順境逆境◎求なり者

論 宗教の本體(村上專精) 佛陀の平等主義(楠龍)

寄 精神界に關する意見(澤柳政太郎)

釋 光明攝取の文◎親鸞(曉鳥)

講 信する力◎清澤滿之

感 海の歌(杜) 俳句和歌◎非無光

雜 再生後の樂果◎如常磐大定 ◎殉教者伽那提

婆(佐々木) ◎信仰上◎永崎智順 ◎波利質多◎花

◎勇氣(近藤純悟)

社 明治三十三年の社會史

報 東京の思想界、及び佛敎界の大勢 ◎浩々洞

發 行 所

東京北豐島郡巢鴨村一八八五

精神界發行所